

## 今を生きる

昨年十一月、学校で特攻隊の演劇を観ました。敗戦の色が濃くなった太平洋戦争の末期に、若い軍人を航空機に乗せてそのまま敵の船に突入させて撃沈させるといふ特攻隊に志願し、「見事散りましょ、国のため」と歌う若者。生と死の狭間で苦しむ姿や日本の勝利のため自分の命を捧げた隊員、その一方で、死ぬに死ねなかつた隊員が後悔の念に生涯襲われていることを知り、目頭が熱くなりました。

観終つて、先生から感想を尋ねられた私は、「すごかつた。感動した」と、ありきたりな言葉を口にしました。すると先生は「それだけか」と言われました。その時私は自分自身の事を考えてみました。

広島県で生まれ育つた私は、幼い頃から、「戦争は二度とあってはならない。平和な世界が一番だ」と家でも学校でも教えられていました。そして広島平和公園や資料館に行ったり、黙祷を捧げたり、また祖父母からは原爆投下された広島を恐ろしい話を聞き、他の誰よりも戦争や平和を身近に考えていたはずなのに、私は心のどこかで戦争を自分とは遠い存在として受け止めていたのではないかと気付いたのです。

演劇鑑賞後、校長先生から、「これが何か分かりませるか」と手のひらサイズの茶色くてゴツゴツしたのを見せられました。持つとずっしりとした重さが手にこたえました。不思議そうに見ている私に、「これは手榴弾だ」と言われ、学校に残る戦争の痕跡についても話を聴かせてくださいました。

昭和二十年、岡山県の私の高校からも在学中に特攻隊員として戦争に行かれた方がいるというのです。どうして彼が特攻隊員として選ばれたのかというと、それはただ「校内で最も優秀な生徒だったから」という理由でした。そして、先輩は国のために、また、自分の力で戦争を終わらせる覚悟で戦地へ向かわれたそうです。一方、学校では本土決戦に向けて、模擬手榴弾を使い、日々練習が行われていたというのです。また、戦時中に使っていたヘルメットや掲示されていたポスターを見せてもらい、当時の話を聞かせていただきました。その話を通して、将来の平和のために多くの犠牲者がいたのだと気付

きました。

そんな昨年、漫画家で『アンパンマン』の作者である「やなせたかし」さんが九十四歳で亡くなられ、柳瀬さんの人柄や人物像もたくさん報道されました。その中で私が一番心に残ったのは、柳瀬さんの弟さんが大学在学中に海軍航空隊に招集され、特攻隊員として出撃し、二十二歳の若い命を散らしたことの無念さを込めて『アンパンマンのマーチ』の歌詞を書いたのではないかとのことでした。

「今を生きること、熱い心燃える。だから君は行くんだ。微笑んで、そう、嬉しいんだ。生きる喜び、たとえ胸の傷が痛んでも、ああアンパンマン、優しい君は、行け、皆の夢を守るため。」と、柳瀬さんは戦争を否定し、今を生きる大切さと食べること、に困っている人を助けることが「正義」だと言われているのだと思います。

日本では、私達若者は、戦争や平和について、あまり深く考えていないように思います。幼い頃から平和教育を受けていたはずの私でさえ、上辺だけの平和を口にしていたのです。人間は永遠に生きることができません。授かった命を全うできるように、今この瞬間を真剣に生きなければ、生きたくても生きることができなかつた方々に申し訳ないと思うのです。私が今を生きることができるのは、戦争で自分の命を捧げた方や戦争を生き延びた祖父母がいたからであり、かけがえのない命があつたからです。そのことを忘れて、ことなく、私は真剣に今を生きたいと思います。そして、今を生きることが出来ている私の責任は、私が学んだ平和の大切さと、二度と戦争をしてはならないことを皆に語り継ぐことだと思っています。